

国立オランダ建築博物館主催 展覧会に出展 「現代日本建築・都市計画・ランドスケープ展」

建築と周辺環境の関係がテーマ、
「アートポリスを考える会」のメンバー
多数がオープニングに参加

昨年オランダでは、日蘭交流400周年を記念するさまざまなイベントが行われ、そのクライマックスとして、昨年10月20日～1月14日まで「現代日本建築・都市計画・ランドスケープ展」が開催された(会場/国立オランダ建築博物館・ロッテルダム)。くまもとアートポリスも長期間にわたる質の高い建造物の創造による地域文化の向上や地域活性化に貢献している点が評価され、国立オランダ建築博物館より要請があり出展した。

今回の展覧会は、都市化、過疎化によって変化する日本の各地域を抜きにして日本の風土、風景、生活環境、そして建築の現在・未来をトータルに考察することはできないとして、大都市から地方都市、農村、自然へと広がる日本のトータルなランドスケープを背景とした建築展。

オープニングの10月20日には、社会的、文化的背景と現代建築をテーマにしたシンポジウムも開催され、在蘭日本大使、オランダ文部省文化局長を迎え、500人以上の参加者があった。

来場者は、5メートル四方にも及ぶ東京都港区の模型が迎える「メトロポリタン(大都市)」エリアをスタートに、順に、地方都市での暮らしを舞台とする漫画が背景の「アーバン(地方都市)」、集合住宅やコンビニエンスストアも垣間見える農村・漁村の風景を背景とした「ルーラル(農村・漁村)」、美しい自然とそこにとけ込む建造物を写真で表現したネイチャー(自然)、アーティフィシャル(人工)へと見学の足を運ぶ。単に、建築物を個々に紹介したり、大都市や伝統的な建築といった日本建築の一部だけを紹介する手法とは異なり、建築物と周辺環境との関係も含めた新鮮なアプローチといえる。

これらの展示は58人の日本人建築家による、92の建築作品などで構成。くまもとアートポリスは、「ルーラル」のエリアで「まちづくり」として出展。雄大な自然と豊富な歴史的建造物を持つ熊本県を舞台とした、質の高い生活空間—くまもとアートポリス—をパネルで表現した。また、各参加プロジェクトが、熊本県全域に広がり、どのような自然環境の中で存在するのかを地図で表し、併せて、最近の推進状況を紹介するビデオ放映も行なうなど、欧州各地からの来場者が、熊本県でのアートポリスの展開を「見て、聴く」ことができよう工夫した。

その他、展示には、清和文楽館、草地畜産研究所畜舎、県立装飾古墳館、ふれあいセンターいすみといったアートポリス参加プロジェクト4作品も含まれる。

「建築物と日本の風景がトータルに伝わった」「子ども連れや学生、お年寄りなど、さまざまな年代の人たちにアピールできた」と博物館のスタッフ。また、博物館館長も、「ヨーロッパ各地の専門家が予想以上に刺激を受けた」とその効果を評価している。非常に注目を集め、多くの人々が訪れたこの展覧会に出展し、海外へくまもとアートポリスをさらにアピールするよい機会となった。

ネイチャーエリアで、ふれあいセンターいすみの写真や模型をじっくりと見学する来場者

アートポリス参加プロジェクト「草地畜産研究所畜舎」



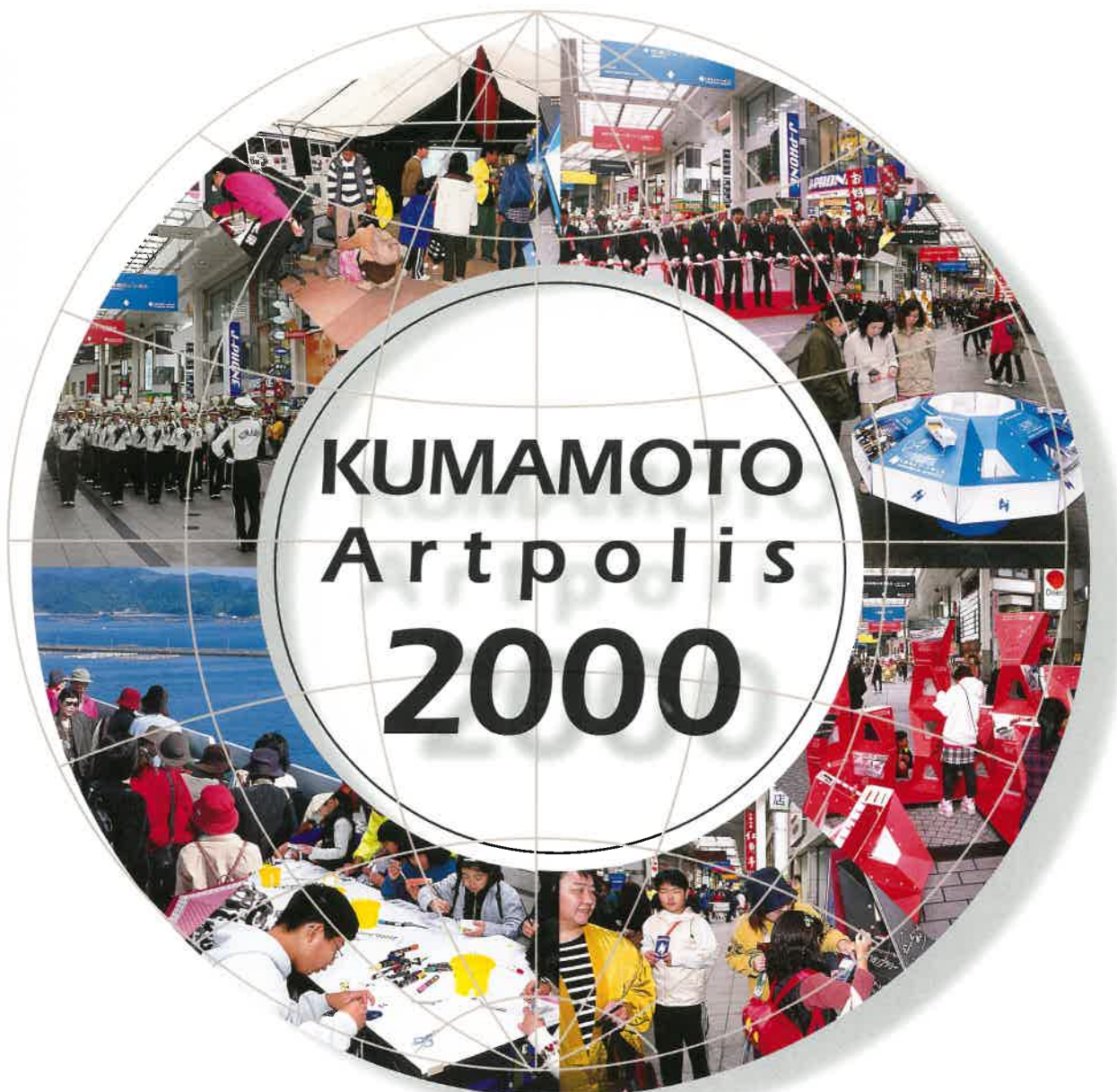
くまもとアートポリスについて紹介したパネル

日本人のライフスタイルを伝える写真を
垂れ幕状にした展示も行われていた

来場者はメトロポリタンエリアの
東京の模型を興味深げに見ていた

kumamoto artpolis news 25

くまもとアートポリスニュース第25号 2001年2月発行



Kumamoto Artpolis 2000

多くの人々がその魅力に触れたくまもとアートポリス2000

21世紀のまちが見えてきた

より質の高い生活空間の創造をめざして1988年から始まったくまもとアートポリス。スタート以来4年に一度行われてきた国際建築展が「くまもとアートポリス2000」として開催された。テーマは「地域と対話、地球とネットワーク」。これは、ひとびとの参加と対話を通して、地域の文化と環境を継承し、地球的な視野から地域を見つめ直すことで、21世紀のまちを創造しようというもの。国内外のゲストを迎え、シンポジウム、展示会、見学会などを中心にさまざまな催しが行われた。



展示会

見るだけでなく、参加する

「21世紀へのアートポリスストリート展」と題して、大人から子どもまで楽しめる参加型の展示会を開催。くまもとアートポリス参加プロジェクトや私たちのまちづくり事業といった熊本の建築文化などを幅広く紹介した。

シンポジウム

多様な角度から建築を考える

自邸「ニラハウス」建築のてんまつを通して住まいづくりの楽しさを語る赤瀬川原平氏（画家・作家）の講演、まちづくりに取り組む建築家によるシンポジウム、21世紀を開く構造システムをテーマとした国際フォーラムなど、多様な角度から建築文化などを考える催しとなった。

見学会

アートポリス建造物に触れる

県内外はもちろん、海外の方たちにもアートポリス建造物の魅力に触れていただくよう開催された見学会。今回は県内全域で7つのコースを設定。各コースとも設計者自らによる説明を聞くことができ、興味深いツアーとなった。

パネル・ビデオ展

12年間の事業をたどる

県内外でくまもとアートポリスを紹介するパネル・ビデオ展を開催。12年間の歩みを通してこれまでの成果を広く紹介した。

協賛事業

それぞれのアートポリス、それぞれの建築文化国立オランダ建築博物館主催「現代日本建築・都市計画・ランドスケープ展」出展をはじめ、私たちのまちづくり事業参加6町における成果発表、県民文化祭など県内各地で、アートポリス2000に協賛してさまざまな催しが展開された。

地域と対話,地球とネットワーク

21世紀への アートポリスストリート展

平成12年11月11日(土)~13日(月)、熊本市下通りアーケード街などを中心に「21世紀へのアートポリスストリート展」を開催。「地域と対話、地球とネットワーク」をテーマに展示がなされ、壁画パフォーマンス、スタンプラリー、コンピュータ映像などを通して、通りを行き交う多くの人がアートポリスに親しんだ。

アートポリスが
もつと身近になった



11月11日(土)11時からのオープニングセレモニーでは「地域と一体になった空間を造りだすのがアートポリス。今までの成果、中身を知ってもらいましょう」と、岡部安水熊本県土木部長のあいさつで「21世紀へのアートポリスストリート展」は幕を開けた。さらに県立熊本工業高校吹奏学部のパレードが華やかさを添え、ユニークなオブジェやスタンプラリー、まるでアートポリスプロジェクト施設に居るような体験が楽しめるコンピュータ映像の放映など、賑わいを見せた。

STREET
EXHIBITION

ストリートパフォーマンス

パフォーマンスによる 地域コミュニケーション

オープニングと同じ11日、地元で活躍するデザイナー松永氏による壁画パフォーマンスが行われた。「アートポリスはデザイン性に優れた熊本県の重要な文化の一つだと思う。県民のみなさんに知ってもらうための、この企画に参加することができて嬉しい。自然、人と人とのコミュニケーションをイメージしながら描きたい」と松永氏。道をゆく人は足を止め、パフォーマンスに見入っていた。



子どもから大人まで参加して
アートポリスを体感



スタンプラリー

「県内各地いろいろなものが見つかるのでいいですね。アートポリス参加作品について参加者たちは認識を新たにしようだ。



コンクール

子どもたちは思い思いの着色を楽しんだ



オブジェ

通りが “アート”で彩られる

建築家直筆のメッセージや模型、写真などを用いたさまざまなオブジェがアーケード街に溢れる。頭上には、シンプルで鮮やかな看板が彩った。



コンピュータ

映像で、 空間を体験する

パソコンや100インチのスクリーンに映し出されるアートポリス施設。画面上で360度見渡せる臨場感溢れる映像に、その場へ行った気分がさせられた。



11日から13日、アーケード街周辺でのスタンプラリーを開催。10カ所のチェックポイントを設け、参加者には県内各地の物産を産呈。建築に興味のある学生から一般の人まで、参加者たちは展示を楽しみながらアートポリスに親しんでいた。

また、12日にはアートポリス作品の一つである熊本北警察署坪井交番の紙模型に着色するコンテストが行われた。参加対象となる小学生の子どもたちは、交番の概念にとらわれず、思い思いの色で自分たちの交番をデザイン。斬新な色使いが審査員の目を引いた、宇土小学校6年生の鳥井翔子さんの作品が最優秀賞を受賞した。

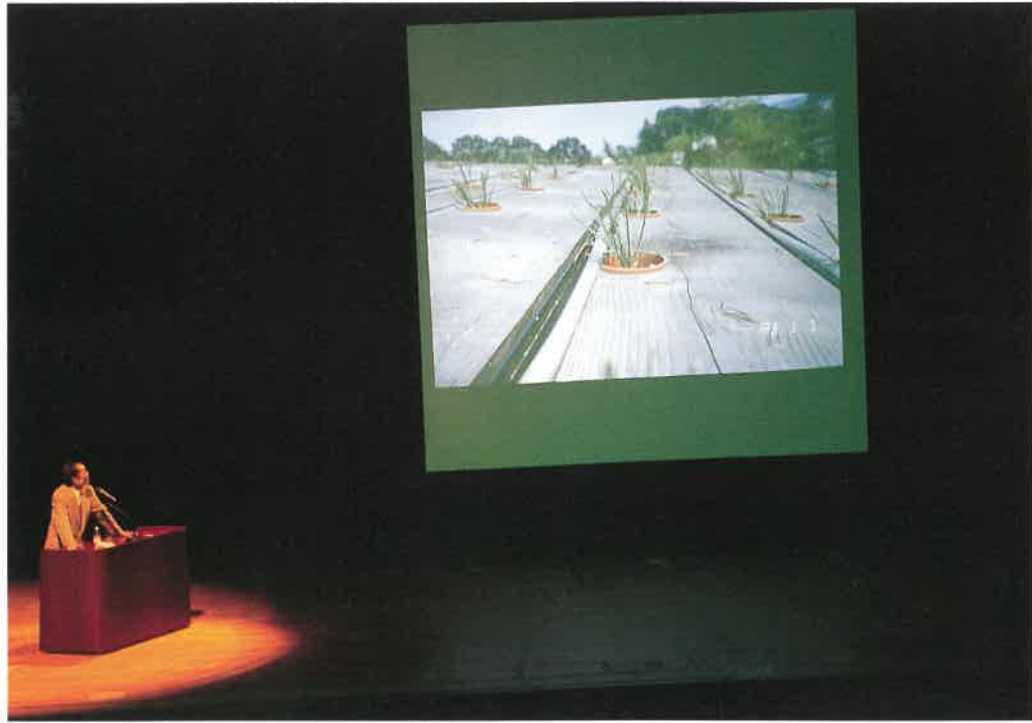


学生たちの企画コーナー

建築科の学生たちが企画したコーナー。何色も用意されたマジックと、フリーのスペース。大人から子どもまで、イラストやメッセージなどを書き込んでいた。

思い思いを、伝えるオブジェ

新しいモノづくりの可能性



芥川賞作家・赤瀬川原平氏講演会

11月11日、熊本県立劇場演劇ホールで「第6回くまもとアートポリス推進賞表彰式」と芥川賞作家・赤瀬川原平氏を講師に迎え、「ぼくの建築体験」というテーマで講演が行われた。

講演 ぼくの建築体験

プロの技に、あえて素人の手を加えることで、いい感触にする「縄文建築団」。彼らから教わったことは、この「乱暴力」だった。

家づくりを自分の手で

私が「家」に興味を持ち出したのは、それまで住んでいた3LDKが、仕事場兼生活空間として使うには手狭になったため。当初は、改築か新しく家を購入することを考えていました。毎日のように、ハウスメーカーのチラシに目を通し、不動産屋をドライブしながら、いい「出もの」はないかと探したりしたものでした。しかし、散々調べてみて、目にするものすべてが「魚の切り身」的な情報ばかりで、ちっとも面白味がないんですね。家とは、自分の人生をかける大きな買い物。普段、絵描きや物書きをやっている人間としては、そのうち、「どうせなら、何か新しいことがしたい」と思うようになりました。当時、いろいろと相談に乗ってくれていたのが、趣味で結成している「路上観察学会」の仲間、建築史家の藤森照信さん。彼は、自分の設計で自分の家を作ってしまった。それも屋根にタンポポを植えるという奇想天外な家です。そんな藤森さんだから、「自分で家を建てる」ということを勧められたわけです。私も、日頃の路上観察で見かけた手作りの家などに魅力を感じていたところもあるので、自分で家を建てる決心をしました。

建築は、「目分量」こそおもしろい

家づくりを実際に手伝ってくれたのは、建築のことには全くの素人という私の仲間たちでした。南仲坊さんをはじめ「路上観察学会」の仲間、編集者や美術学生などです。私は、藤森さん率いるこの素人集団のことを「縄文建築団」と呼んでいます。彼らと一緒に家づくりができたことは、本当にいい経験でした。家づくりについては、「できるだけ安い予算でおさめる」という条件以外、特別何も決まっていませんでした。しかし、藤森さんとしては、当初からこの家を、「床を板で見せたい」という考えがあったようです。それも、同じ幅や厚さの規格品の板を使うのではなく、原木から引いた割り板で見せるというような。美しく加工されているものより、ふぞろいな部分が醸し出す味みたい



なものをもっと大事にする人なんです藤森さんは。

早速、山形にある藤森さんの実家そばの材木屋に出向き、材料となる米松を購入しに行きました。また、私と藤森さん、それに仲間数人で森の中に入り、材料になりそうな硬い栗の倒木を切り出したりもしました。藤森さんは、事前に設計図を作ってから考えていくのではなく、行動しながら家をイメージしていくタイプなんですね。こうした「目分量の世界」を楽しんでいるところが藤森建築のおもしろいところですよ。

ニラを植えた屋根にしても、藤森さんの発想。なんせ屋根にタンポポを植えた人だから、何か突拍子もないことを言い出すのだろうとは思っていましたが、まさかニラとは…。ニラには放っておいても生えてくるほど生命力があり、防水の面でも問題ないということらしい。確かにユニークな発想ですが、建設途中の様子を見たご近所の方々には、何かと白い目で見られましたね。そんな時は、「ギョウザで大儲けした人が住むらしい」とか「どうやらニラソーラーみたいですよ」だとか言って、その場はなんとか切り抜けたんですが(笑)。

「乱暴力」と「いい加減力」

私の家で、力作はお茶室。特に天井には凝りました。かまぼこ状に弧を描いた天井に、小口切りに切った小さい木片を敷き詰めていくものなんですが、藤森さんは、規則正しく切った木片はダメというんです。「武骨なものこそいい」。私はそれを「乱暴力」と呼びます。できあがったものに風通しのいい感触が生まれて、住む人間の気が楽になるんですね。

また、固定観念にとらわれずに素人で家を作りあげようとするいい意味での「いい加減力」の中で、縄文建築団が丸となって作業ができたこともよかった。家を建てるにあたっては、低予算におさめることが第一の条件でしたから、もちろんみんなボランティア。利益を考えない個々の純粋な創作意欲が「ニラハウス」に反映されたこと。それに、プロにまかせっきりにするのではなく、自分が建築の作業に携わったということで、たまらない達成感と充実感もありました。

家を建てた体験ですっかり味を占めて、その後も、美術館や知り合いの事務所など、藤森建築の工事があると聞くとみんなで張り切って手伝いに行ったりしています。今後も、いろんな建築に携わってみたいですね。

多様化し、高度化する建築デザイン



主催者挨拶をする
河野 延夫
熊本県出納長



建設省住宅局建築指導課
建築物防災対策室長
小川 富由氏



熊本県議会議員
熊川 隆夫氏



熊本市助役
後藤 勝介氏



コミッショナー
高橋 誠一氏



アドバイザー
堀内 清治氏

シンポジウム1日目は赤瀬川原平氏の講演会に先立ち、主催者や来賓の方々があいさつ。その後、高橋誠一コミッショナーが、くまもとアートポリスを紹介し、「市民との対話を繰り返しながら、地域との結びつきを強め、まちづくりを活性化させていきたい」と、今後の展望を述べた。

続く「第6回くまもとアートポリス推進賞表彰式」では、7つの建造物が推進賞選賞を受賞。事業主、設計者、施工者へ表彰状が授与された。堀内清治選考委員会委員長が「今回、推進賞選賞を受賞された7件の建造物は、後世に誇れる優れた作品。今後、熊本でいい仕事をしてくださることを祈る」と講評。多様化する建築デザインと年々上昇する建築レベルの高さを実感させる表彰式となった。



第6回くまもとアートポリス 推進賞表彰式

推進賞選賞 受賞施設



中央町福祉保健センター「湯の香苑」

セカンドサイト

やつしるハーモニーホール

ネクステージビル

城南の舎

熊本YMCA阿蘇キャンパメインホール

霧の斎場

「自分たちのまち」を見つめ、まちと人が元気に

私たちのまちづくりシンポジウム

住民自身が、コミッショナー推薦の建築家や行政とともに公共施設の基本計画づくりを行う「私たちのまちづくり事業」。「濃密な対話」を繰り返すことでよりよいまちづくりを目指すものだ。その結果報告を兼ねた「私たちのまちづくりシンポジウム」が、11月12日、熊本テルサのテルサホールで行われた。当日は参加6町の担当建築家やモデレーターとして建築家・曾我部昌史氏を迎え、まず、それぞれの町でのワークショップや基本計画作成について担当建築家が説明。その後、会場の意見も交えながらまちづくりについて可能性に満ちた議論が行われた。

湯前町 湯前駅舎と周辺整備

歴史と新しさの共存から、
世代間交流が生まれる

テーマは湯前駅舎のリニューアル。ここで行ったワークショップで話し合ったのは、駅舎を通して世代から世代へ、何を伝えていくかだったと思う。中高生も参加してディスカッションする中で、本音の世代間交流ができたことが大きな意義だった。結局皆さんの要望や意見を集約し、旧駅舎を残して新駅舎をそれに対比させようというアイデアに落ち着いた。旧駅舎はいわば大正末期の「最新デザイン」、ここには皆さんの思いがある。そこに新しい駅舎という21世紀の最新デザインを並べて「世代間交流」を表現したい。

小国町 小国町立北里小学校屋内運動場建替

さまざまな参加者が考える、
地域の未来

事業の該当地域は、文化的施設が集積している。その中で小学校の体育館をどう地域のものとしていくか、今までの成果をどうまちづくりに生かすかが課題だった。ワークショップを重ねた結果、出た意見は大きな建物は要らない、しかし文化施設の側面があるホール機能ほしい、さらに集会所機能があれば、というものだった。学生ワークショップでは地元の人のほか、九州ツーリズム大学の学生たちも参加。体育館建て替えを機にさまざまな人たちに地域の20年後、30年後を考えてもらったことがよかった。

砥用町 砥用町文化交流センター建設

実質的な使い方を討議し、
最小公倍数のプランに

このまちの特徴は、計画だけでなく実施設計も伴ったものだったこと。これまでまちには文化施設がなかった。ホール自体は大きなものではなく、小さくていい、全体として有効なコミュニティーセンターの役割を果たしてほしいと考えた。普通自治体の多目的ホールは、最大公約数的に造られるが、ここでは最小公約数的に実質的な使い方を討議する中でプランが生まれた。このまちは林業が基幹産業でもあるので、構造にもデザインのモチーフにも木を使っている。

南小国町 南小国町宮杉田団地・矢津田団地建設

とにかく、分かりやすい
ワークショップで要望を聞き取る

テーマは町営団地の建て替えだった。ワークショップとはいえ、この言葉自体、住民になじみがなかった。例えば、どんな木が好き?というように、できるだけ分かりやすく、話し合いを進めていった。あまり意見が出なかった中で、突出した意見は車でできるだけ建物に近づけないか、古い近隣関係を壊さないか、というもの。人と車のほどよい分離をしながらつなげる、というプランにこだわった。周囲の山並みを意識し、屋根の形態も考慮した。

苓北町 文化会館建設

コミュニティー機能とネットワーク
機能を連結するコア施設を

21世紀、地域で暮らすというのはどういうことを念頭にワークショップを行った。ワークショップのねらいは、ニーズ、意見収集、人・ものなど地域資源にどのようなものがあるか確認、公共圏拡大の可能性をさぐり引き出すことの3点。地域の連携を強めるコミュニティー軸と広域的広がりを持つネットワーク軸、両方を連結する施設を考えた。結局、広域的ネットワーク機能としてホール、コミュニティー機能としてボランティアサロンを、つまり「何かしたい」人のための施設となりうるものを作りたい。

蘇陽町 馬見原地区まちなみ整備

住民自身の手で
「21世紀のまちなみ」をつくる

施設計画ではなく、旧旧向街道があった商店街のまちなみ整備、というのがこのまちの特徴。キーワードは二つある。「21世紀のまちなみ」と「自分たちでできることとする」。21世紀ということでテクノロジーの活用は不可欠。まちなみ整備と保存は違う。歴史のまちなみを保存するだけでなく、未来の風景を造る必要がある。その際、まちの人ができることはやっていく、という提案を行った。例えば、看板を作るなど。また、リサイクルできる素材で太陽電池パブリックルーフをつくるという、自然共生型の技術を使ってテクノロジーのお花畑を造りたいとも提案している。



湯前町担当 宇野 求氏 (千葉大学助教授)
小国町担当 末廣 香織氏 (NKSアーキテクト代表)
砥用町担当 八東 はじめ氏 (ユービーエム代表)
南小国町担当 片山 和俊氏 (東京芸術大学教授)
苓北町担当 小野田 泰明氏 (東北大学助教授)
苓北町担当 阿部 仁史氏 (東北工業大学助教授)
蘇陽町担当 岡河 貢氏 (広島大学助教授)
モデレーター 曾我部 昌史氏 (みかんくみ共同代表)



コミュニケーション
する。人と見えない人、
人、地域、明日

ディスカッション・タイム

- 曾我部 この「私たちのまちづくり事業」のメリットについて、皆さんどう考えていらっしゃいますか。
- 宇野 地域を考えると、人をつくらないといけない。ワークショップはそのためにある。まちの外から人が入り、町内外の人が本音のコミュニケーションをとることが刺激になります。
- 末廣 小国の場合は子どもも参加したんですが、子ども、その親たち、そして僕たち建築家が接するのはすごくいい刺激でしたね。
- 阿部 外から来た人間は、大体まちの人が気づかないことに気づくんですね。
- 八東 地域はどこもそれぞれに特性があります。その特性を生かすために、そこに住む人が納得いくまで話をしてくれたのは幸せでしたね。それをプランにどう反映させるかが建築家の役割です。
- 片山 住宅の場合はそういう要望や意見がなかなかない。何気なく住民の皆さんが口にする言葉にニーズがある。そういう「つぶやき」を発見するプロセスがワークショップともいえますね。
- 曾我部 自分たちの希望をかたちにするには、住民の積極性は不可欠でしょうか。
- 宇野 積極的といえば、湯前では中高生が大人をリードするくらいでしたね。自分は一度はまちを出るけど、いつかここに帰ってくる、なんて言う若者がいたりして、大人たちは泣きました。
- 小野田 「自分たちのまち」意識が芽生えたんですね。苓北で、おもしろいアンケートがあって、やる前は「やりたくない65%」やった後「やってよかった95%」っていうんです。僕たちの場合はこの施設自体、自己実現の場にしたかった。そのた

- めにも「実現」すべき自己がないとだめなんです。
- 宇野 やはり人づくりの場なんです。まちづくりは。
- 末廣 自分たちの手で自分たちのものをつくる意識が育ったんです。
- 岡河 地域のアイデンティティというか、都市の真似ではなく蘇陽として洗練されていく、というのがかっこいい、と思うんです。自分たちの根っこをきかすきっかけだったんですね。「私たちのまちづくり事業」は、それは建築家のオリジナリティよりまちのオリジナリティをどう顕在化させるか、ということでもありますね。
- 小野田 施設は自分の思念や能力を飛ばすためのプラットフォームの役割を担うべき。その密度が高いことがまちの面白さじゃないですか。
- 末廣 まちにとって大事なのは、まちに誇りが持てるか、ということですね。そしてどれだけ人材がいるか。小国は少なくとも誇りが持てる、生きる喜びがありますね。
- 会場から1 今までのまちづくりは、行政が何かやって住民はお手並み拝見みたいなところがあった。でも自分たちに何かできるかを考えないとまちづくりはできない。その意識の高まりに意義がありました。
- 会場から2 今回の事業はものを造っていく枠組というのではなく、地域力をどう高めるかだと思います。デザインとは、参加のかたちだと考えています。
- 曾我部 私たちのまちづくりの成果は、人と地域の可能性が広がった。それ自体がまちの資産



よりダイナミックに ジオメトリー(幾何学)が蘇る

国際建築フォーラム
「21世紀を開く構造システム」

11月13日、熊本テルサのテルサホールで世界的に活躍する構造エンジニア、セシル・バルモンド氏を招き、「国際建築フォーラム」が開かれた。会場には多くの聴衆が詰めかけ客席は満席、立ち見客も出るほどの関心が集まった。



挨拶する潮谷義子熊本県知事

はじめに、潮谷義子知事が「最近、素人ながら構造というものが大きく変わってきているのではと感心させられます。今後もアートポリスが、地域の愛着の形成や隣人との連携といった新たな地域づくりの手法として活用されることを期待します」とあいさつ。バルモンド氏の講演の後、佐々木睦朗名古屋大学教授、伊東豊雄アートポリスバイスコミッショナーが参加して鼎談も行われた。



今まで以上にエンジニアと建築家が 密接な関係を築くことが大切

鼎談では、パネリストの佐々木睦朗、伊東豊雄両氏から、バルモンド氏に質問が投げかけられた。また、アートポリスコミッショナーの高橋謙一氏からも、客席より質問が飛んだ。

▼佐々木氏「非線形領域におけるジオメトリーとエンジニアリング(工学)という問題をセットでどう考えていますか?」

●バルモンド氏「エンジニアとしては、シェーブ(形)ではなくジオメトリーだと思います。ジオメトリーの接合性自体、ストラクチャー(構造)のあり方です。古典的かつ形式的な理念では、ジオメトリーとシェーブ(形)は分けて考えて構築することもできますが、私の今回のプロジェクトではその二つを一つのものとして考えています。ジオメトリーがあってそれを構造としてどう構築、実現していくかというのではなく、根本にあるものはジオメトリーであり、それ自体が構造だと思います。従って、私はこの2つをあまり分けて考える必要はないと思います。」

▼佐々木氏「エンジニアの立場から、ジオメトリーとストラクチャーの形態の間で疑問は持ちませんでしたか?」

●バルモンド氏「この手法自体非常に実験的であり、確かにねじれや座屈の問題を抱えています。しかし、それを気にしては構図の中に入っていけません。私はエンジニアとして今まで勉強し積み重ねてきたものや、技術的な課題点をいったん横に置き、どういった可能性があるのかというジオメトリーをまず追求していきます。そして、そこに積み重ねてきたものを重ね合わせていく方法をとっています。」

◆伊東氏「ノンリニア(非線形的)な理論を用いて建築の形の問題を解いていく時に、初期条件が少し違うだけでその後の解法がかなり変わってくると思います。その時、最適解をどのように決定しているのでしょうか?」

●バルモンド氏「2つの手法があると考えます。私も最初の20年くらいは非常に古典的な方法で建築を作っていました。しかし、本当にこれで全てなんだろうか?と考えた時、今までの方法は大きな可能性の中のわずか一部分であり、広いところの可能性の目を向けていないのではないかと思います。実験的に始めたのです。同じような解析プログラムを使い、容積を最大にしたり、表面積を最小にするという機械的なパラメーターを使っての最適解もできるし、単純にこれが好きだ、これがいいという主観的な最適解もあると思います。」

◆伊東氏「そう考えるようになったきっかけは?」

●バルモンド氏「古典的なギリシア数学を勉強し始めて、プロポーションや建築というコンセプトに直接触れた時、ジオメトリーがギリシア数学の中で非常に生き生きとしたものだったということです。昔は、パラディオが生き生きとしたものとして正方形や長方形を使い、建築を構築していました。当時、



セシル・バルモンド氏



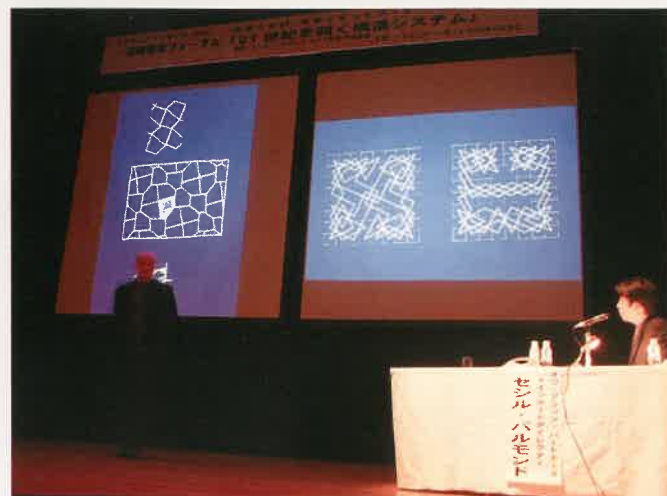
伊東豊雄アートポリスバイスコミッショナー

私が悩んでいた時は、自分が使っていた四角は、本来の生き生きとしたコンセプトを失い、平面化された、ただの形だけがありませんでした。そして、構造は本来どう建築に関係していくのかと考えてみた時、結局アーキテクチャー(建築)とストラクチャーは同じだという結論にたどり着きました。形式としての構造=アーキテクチャー(建築)ではない。こういったアプローチから、建築と構造のあり方を探っていきたく思っています。」

■高橋氏「建築家がエンジニアを縛ることもできないし、逆にエンジニアが建築家を縛ることもできません。そこは非常に難しい境目だと思いますが、どういったせめぎあいと協力があると考えますか?」

●バルモンド氏「歴史的に見れば、建築家がエンジニアに束縛されてきたというよりは、可能性を育ててきたという部分が大いなのではないでしょうか。建築家はジオメトリーのマスターです。それが技術面が発達していくに従い、ある種のエンジニアリング(工学)や技術的な隔離を受けて分離してしまいました。古典的な形式に則った形式の場合、アーティストとしての建築家と技術者としての建築家が分かれていても、それほど支障はありませんでした。けれども今は、市販されているソフトでいろいろな形態ができるようになり、非常に危険な時代になっています。そういう時代だからこそ、これまで以上にエンジニアの方から建築家に積極的にアプローチしていく必要があると思います。また、逆に建築家も対等にお互いの意見をぶつけあい対話しながら作り上げていくことが大切です。建築家とエンジニアの関係はこれまでとも言われ続けていることですが、デザインする側と作る側(施工者)にも同じことが言えると思います。よい建物を作るためには、建築家とエンジニアの関係も、デザイナーと施工者も、よいチームプレーを行っていくなければいけません。」

「構造とは推理と確信のフィードバックループ」 講演 セシル・バルモンド氏



今日まで、私たちが建物の構造を構成する方法に大きな変化は起こりませんでした。古典的な形式の矩形配置に従って、柱や梁を組み上げてきたのです。現在必要とされているのは、現代的な個々のアプローチによって、構造が建築にとってのひとつの媒体となって、ジオメトリー(幾何学)の蘇生を図ることです。

21世紀の構造は、点や線ではなくゾーン(領域)やサーフィス(表面)から始まり、フレームではなくネットワークやパターンであり、スケルトン(骨組み)ではなくトラジェクトリー(軌道)やパターンを作っていく軌跡のようなものだと思います。そして、柱や梁といった古典的なフレームを使った、静的にバランスのとれたシンメトリーではなく、非常にダイナミックなものとしてのシンメトリーを追求していくべきではないでしょうか。

構造とは、単に技術的なものではなく、推理によって仮説をたて、フィードバックによって検証し、確信に至るといったひとつのループ、すなわち推理と確信のフィードバックループそのものにほかなりません。フィードバックのプロセスを通して、材料や施工の方法を我々に考え直す機会を与えてくれるのではないのでしょうか。また、これによって、建築家とエンジニアのもっと親密な関係性というものが我々に求められるのではないのでしょうか。



県内から海外の方まで 多くの方がアートポリスを満喫

アートポリス参加プロジェクト 見学バスツアー

もっとアートポリスに親しんでもらおうと、10月から11月にかけて見学会を開催。県内全域7つのコースに大勢の人が参加し、現地で設計者の説明を受けた。



船の瀬大橋(矢部町)

「地域と地域を結ぶ橋を中心に」

馬見原橋をスタートに清和文楽館で文楽観賞後、清和物産館、通潤橋と県央エリアの橋を中心に見学。矢部町の船の瀬大橋では設計者の大野美代子氏が説明を行った。



有明フェリー長洲港ターミナル(長洲町)

「県北の歴史と今の姿を」

県立農業大学校学生寮から、一転して鞍智城、八千代座と県北の歴史と奥の深さを体感。県立装飾古墳館では建物で新しい文化の息吹を展示物で古代を感じた。有明フェリー長洲港ターミナルでは設計者の石田敏明氏が説明。

「八代・芦北、輝く七浦に 映えるアートポリス」



不知火文化プラザ(不知火町)

津奈木町のつなぎ物産ギャラリー、芦北町の県立あしきた青少年の家と芦北七浦泊りを見学。御立岬から八代市立博物館、近世の歴史的遺産・松浜軒を見学後、不知火文化プラザを見学。「アルミニウム製のスクリーンの輝きは、不知火そのものをイメージした。図書館と展示の機能があるので両者の共有スペースを設けたり、壁を可動式にしたりと工夫している」との設計者の北川原温氏の説明に、見学者も納得した様子だった。



県立農業大学校学生寮(合志町)

「県南から県央まで 幅広いエリアで巡る」

全国からの参加があり、清和文楽館・物産館、船の瀬大橋、不知火文化プラザなどを見学した1泊2日のコース。翌日は、県立農業大学校学生寮見学後、国際建築フォーラムへ参加した。県立農業大学校学生寮では設計した藤森照信氏が「できるだけ荒削りの木肌の感触をいかしたかった。地元産の木材を使って欲しいとの要望もあり、自然素材を使った暖かな空間に仕上がったと思う」と設計意図などを説明した。



清和文楽館(清和村)

海外からの見学者対象コースらしく、建造物に加えて阿蘇の雄大な自然景観も堪能できる2泊3日のコース。小国町の建造物、アスペクタや馬見原橋などを見学。清和文楽館では設計者である石井和純氏、熊本市宮新地団地E棟では設計者の上田憲二郎氏がそれぞれ自らの作品を解説。見学者からは「都会的な建物に囲まれながらも心が安らぐ」と賞賛の声が上がった。

「天草の光の中でたどるアートポリス」

宇土マリーナハウスを皮切りに、1泊2日で天草の建造物を巡った。天草工業高校実習棟・体育館などを見学した後、アートポリス推進賞選奨受賞の丸尾焼工房へ。県民文化祭の一環である天草大陶芸展見学もコースに組みこまれ、焼き物という「アート」への興味も尽きない見学者だった。翌日は岡部憲明氏の説明で牛深ハイヤ大橋を見学、県民文化祭アートポリスシンポジウムへ参加した。



丸尾焼工房(本渡市)

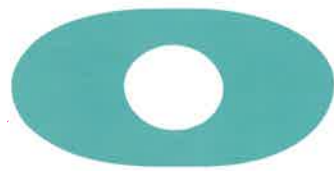


牛深ハイヤ大橋(牛深市)

県外の方を対象としたコース。福岡空港から天草エアラインを利用して天草空港に到着。岡部憲明氏の説明で牛深ハイヤ大橋を見学後、県民文化祭アートポリスシンポジウムへ参加し、さらに本渡市の国指定重要文化財である祇園橋へ。翌日は、天草工業高校実習棟・体育館を見学後、不知火文化プラザ、東陽村の石匠館、県立農業大学校学生寮を巡る広範囲なコースとなった。

「天草を起点とした 広範囲なコースで充実感」

「都市から農村まで 自然・文化豊かに」



「見た」「聞いた」「わかった」 アートポリスの12年

最新のアートポリス情報がここにある

県立美術館分館(熊本市):10月31日~11月12日

県立農業大学校学生寮、
鮎の瀬大橋など、96年
以降完成のくまもとア
ートポリス参加プロジェ
クトに加え、砥用町文化
交流センター、湯前駅舎
と周辺整備など、私たち
のまちづくり事業の成
果をパネルや模型で展
示。「写真が多く、模型
もあって分かりやすい」
と学生やお年寄りにも好評。「私たちのまちづくり事業では、ワークショップ
が開かれているようなので、機会があったら参加してみたい」という声もあった。



県外にもアートポリス 事業をPR

福岡市天神地下街:9月1日~3日



アートポリスがスタートして12年。これまでの成果を県外の方にも知っていただこうと、福岡市天神地下街でもパネル・ビデオ展が開催された。熊本北警察署など初期の作品から、高橋駅一コミッションナーが就任後、最初のプロジェクトである県立農業大学校学生寮まで、施設を活用した各地域での取り組みも併せて紹介。地下街を歩く人は足を止めて見入っていた。

天草エリアの プロジェクトを中心に発信

天草空港(天草郡五和町):10月28日~11月5日



天草地域での県民文化祭の開催期間に合わせ、天草空港でパネル・ビデオ展が行われた。牛深ハイヤ大橋やうしぶか海彩館、天草工業高校実習棟・体育館など天草地域のアートポリス参加プロジェクトを中心にパネル展示。また、コミッションナー交代後のアートポリスの新しい歩みなどを紹介したビデオも放映された。

県民文化祭

天草の自然の中で 考える建築文化

「イルカ はばたけ 藍の島」をテーマに、
10月28日~11月5日開催された県民文
化祭ミレニウム天草。食文化や自然・景観
など4つの分野にわたって多彩なイベ
ントが繰り広げられた。ここでもアートポリス2
000に協賛したパネル・ビデオ展やシンポ
ジウムが行われた。

橋が、文化と人のところをつなぐ

アートポリスシンポジウム

牛深市総合センター:11月5日

牛深ハイヤ大橋の設計者である岡
部憲明氏による基調講演が行われた。
引き続き、鮎の瀬大橋設計者・大野
美代子氏、熊本県文化協会最高顧問
三浦洋一氏を迎え岡部氏とともに
パネルディスカッションも開催。コ
ーディネーターは熊本日日新聞社
監査役・久野啓介氏が務めた。



久野 私はアートポリスを新しい風景をつくる運動だと思っています。今日はアートとしての橋と、橋を地域づくりにいかに活用するか、という二つのテーマでお話を聞きたいと思っています。
大野 鮎の瀬大橋設計のポイントが周囲の風景を生かすこと。材料は凝灰岩と調和するコンクリートに、渓谷の美しさを損なわないよう、橋脚を少なくし、タワーを建ててケーブルを張りました。
岡部 渓谷にはリズムがあり、橋はそれに新しいリズムを与えるものですね。私もハイヤ大橋は青い海の風景を損なわない水平なカーブを考えました。デザインのおもしろさは一般解がないこと。これは、という特殊な解答を見付けることが大事です。橋梁の形ひとつとってもさまざま。ディテールが重要になってきます。
三浦 日本の自然は多様です。それぞれの風土に根ざした「解」があるわけですね。

パネルディスカッション

自然・景観と橋の文化

風土に根ざしたデザインで
地域の生活文化に根ざした建造物を



熊本県文化協会
最高顧問
三浦 洋一氏



鮎の瀬大橋設計者
大野 美代子氏



コーディネーター
熊本日日新聞社監査役
久野 啓介氏

例えばハイヤ大橋は簡潔でいて優雅ですし、鮎の瀬大橋を農道から見た時、まさに新しい風景の出現だと感じました。
久野 一般解のないデザインに解を与えるポイントは何でしょう。
岡部 巨大なものに、どう「やさしさ」を与えるかです。
久野 では2番目のテーマである地域づくりについてはいかがでしょうか。
大野 鮎の瀬大橋のたもとに地元の物産販売所ができたのには驚きました。
岡部 ハイヤ大橋の場合は、地元の人が散歩したりしてなじんでいますね。町をどうするか考えるときの「見晴らし台」としての橋という機能もあると思います。
三浦 優れた建造物は環境に溶けこみ、優れた文化財として後世に残ります。天草には五橋があって美しい景観をつくってきました。
大野 そういう美しい風景は子孫に残す

べき大切なものです。その結果として、観光客が集まればいいですね。
三浦 アートポリス事業があと50年続いて多くの建造物が残っていけば本当の「アートポリス」ができるでしょう。夢をもって続いてほしいものです。
久野 アリストテレスは「場所に力がある」と言っています。それを引き出すのが建築ですが、その建物が地域に根付くためには、何よりも住民の心に根付いていくことです。アートポリス参加プロジェクトがこれから新しい生活文化の創造に寄与していくことを願って閉会したいと思います。皆さんありがとうございました。

天草の空間をアーティスティックに

アートポリス展

うしぶか海彩館:11月1日~5日

天草地域のアートポリス参加プロジェ
クトを中心にパネル展示とビデオを放映。
見学者は、「こんなに天草にアートポリ
スがあったんですね」とパネルを見入
っていた。



建築で最も大切に
しているのは
環境です



基調講演

「風景と生きる橋」

牛深ハイヤ大橋設計者
岡部 憲明氏

1947年静岡県生まれ。開空ターミナル国際コ
ンペ優勝。1996年神戸芸術工科大学教授

長く建築に携わった人間として、一番重要だと考えているのは環境です。ヨーロッパへ行くと都市全体が美しく保たれています。施設も町の雰囲気を変えないようになっている。パリなどへ行くと努力して景観を保っているのが分かります。土木や建築というのは、空気のようなもので周囲と溶け込んで違和感がないことも大切です。
21世紀を迎えるに当たって、このように環境をいつも念頭に置くべきだと思うのです。インフラストラクチャー(社会資本)に対して十分コストを支払う必要があります。例えば、ハイヤ大橋は大きな投資でしたが、橋という建造物と自然がうまくマッチするよう設計したつもりです。青い空と海の邪魔をしないよう配色も銀色に見えるグレーにしましたし、流線が景観を美しく分割するよう配慮しました。公共物ですから、あとは牛深市民の方にうまく使っていただきたいと思っています。



湯前町

湯前駅舎と周辺整備

湯前町では、恵まれた自然環境を生かし、湯前駅周辺を“森”としてアピールするまちづくりが進む。住民と宇野或干葉大助教授、熊本大学横山俊祐助手らとワークショップやディスカッションが重ねられてきた。今回の焦点は、現湯前駅舎。宇野助教授からは、「現在の湯前駅舎は、手を加えてそのまま残し、現駅舎と左右対称になるよう、隣に同じ形の木造ガラス張りの新駅舎（コミュニティスペース）を建設しては」というアイデアが提案された。築約70年の現駅舎と新駅舎。2つの駅舎のテーマは“お婆ちゃんと孫”。お年寄りから子どもまで、町民が気軽に立ち寄り触れ合える場所、町を語り継いでいく場所として利用してもらえたら、という願いが込められている。実際、まちづくりを通じたお年寄りや中高生との交流が、お互い良い刺激になっているようだ。住民の皆さんからは、「左右対称の駅舎とは思いつかない素晴らしいアイデア」という声が多く。また、「焼酎の町湯前らしく、新駅舎は、ガラス張りより瓶蔵風がいいのでは」、「思い出がたくさん詰まった現駅舎は、そのままの形で残してほしい」などといった要望も出された。



世代を超えた住民の交流が広がる



私たちのまちづくり展

平成11年度から始まった「私たちのまちづくり事業」。参加した町では、これまで活発なワークショップが行われ計画が進行。アートボリス2000の協賛事業として各町でその成果発表が行われた。

それぞれの「こうしたい」がカタチになつていく

小国町

小国町立北里小学校
屋内運動場（体育館）建替

小国町では、北里小学校の体育館の建て替えを機に“まちづくり”を検討中。北里地区では、地域住民と新しい施設のあり方について考えようと、計6回のワークショップが開催された。11月3日、小国町商工会館で、基本計画の作成を担当している末廣香織氏が地域住民へ向け、ワークショップの報告会を行った。ワークショップでは、住民の意見や要望をまとめ、新しい施設についての理解を深めていくための機会を提供している。敷地や予算、使用材料などの問題について、幾度となく意見が交わされた。北里小学校の生徒が参加した第4回のワークショップでは、「室内サッカー場がほしい」「体育館の屋根が自動で開閉したらいいな」と子どもらしい夢がある意見が目立った。最終的には、少子高齢社会に対応できる施設を目的とし、体育館機能だけでなく、演劇やコンサートができるホール機能など、地域と連携したコンピニの小規模複合文化施設へと転換する方向で進められる予定。施設の運営がスムーズに行われ、建物自体がうまく機能していくよう期待される。



文化・スポーツのある暮らしが議論を通して見えてくる



砥用町

砥用町文化交流センター
建設

期待、希望、意見：
言葉にすることで夢はカタチになる



建築家の八束はじめ氏と町民代表によるワークショップを重ね、実施設計を終えた「砥用町文化交流センター」。その内容を町民に伝える発表は、11月3日、砥用労働者体育センターで開催された「砥用町文化祭」の中で行われた。会場には多くの町民が集まり、ホールや図書館、研修室などを備えたセンター建設に期待が集まっている。説明に先立ち、北川浩一郎町長が「21世紀は文化の時代。砥用町の文化高揚の拠点となり、まちづくりの核となる施設にしたい」とあいさつ。その後、八束氏がスライドで設計図を大写ししながら、「お年寄りの利用を考えてホールの段差を少なくしました。コミュニティホールは作品展示のほか、バンケットルームとしても利用できる機能を持たせました…」などと、設計のポイントを分かりやすく説明。センターは平成13年1月に着工、翌年3月完成の予定で、建物の愛称を募集する計画もある。



南小国町

南小国町宮杉田団地
矢津田団地建設

今まで育ててきたコミュニティを大切にしたい—
そんな住む人の「こころ」を具体化する



老朽化が進んだ町営団地の建て替え計画を、住民との話し合いの中で進めてきた南小国町。現在、杉田団地に住んでいる人たちにとって、自分たち自身の暮らしの場となるだけに、「今まで築いてきた近隣の人たちとの関係がこわれないような、住民同士のつながりが保てるようにしてほしい」「病人やお年寄りのために、自家用車を入りにつけられるようにしてほしい」といった要望が出されてきた。2月4日、担当建築家である片山和俊氏は最終案を提示。片山氏は住民の要望にこたえつつ「林業の町・南小国にふさわしく風通しのよい木の住まいにしました。また、この団地は市街地への入り口ともいえる場所にあり、ゲート性も意識しています」と設計意図を説明。住民からは駐車場の使い方から建築時期など、より具体的な質問が出され、今回の建て替えへの関心の高さが感じられた。



苓北町

文化会館建設

一人ひとりが「声」を出す—
そこからまちの元気が生まれる

旧役場跡地に、何か町のために役立つ施設を作りたい。そんな町民の声から始まった、苓北町のまちづくり。地区住民と役場職員に、参加建築家である東北大学の小野田泰明助教授と東北工業大学の阿部仁史助教授を交え、これまで数回にわたって熱心なワークショップが行われてきた。

11月6日の検討会議では参加建築家が町の現状と、これまでにあった意見等をグラフや表にまとめ、分かりやすく説明。キーワードは「ネットワークとコミュニティー」。新施設は、老若男女、誰もが自由に利用できる敷居の低い集いの空間（コミュニティー）と、非定期的だが質の高いイベントが行えるステージ機能（ネットワーク）による2つのゾーンを設定。IT化に対応した情報モールの、若者の出会いの場となるオープンキッチン&バー、ボランティアサロンなども加わっている。

今まで頭の中で想像していたものが、声に出すことで具体的に見えてきて、人の意見と融合することで現実的なカタチとなる。町の未来を担う新しい施設のカタチは、全員一致の大拍手で可決。自分たちの思いがカタチになったことで、まちづくりへの夢はさらに前進していく。



蘇陽町

馬見原地区まちなみ整備

「私たちのまち」
の魅力を
再発見する



11月5日、平成8年から地元住民を中心にまちづくりを進めてきた馬見原地区で、町外の参加者を募り「地域環境ウォッチング」が行われた。熊本県全域から40人が参加。アートポリス参加プロジェクトの一つである馬見原橋や現在、商店街となっている旧日向街道、幣立神宮などを「残してほしいところ」「改善したほうがよいところ」などの視点で観察した。

午後は、ウォッチング参加者と地元住民が参加し、馬見原公民館で「まちづくり発表会」が開催された。馬見原のまちづくりに携わっている岡河寛広島大学助教授が、自然や今あるまちなみを活かしつつ、太陽電池を使ったフラワールーフ（花の屋根）で道や多目的広場、茶畑の休憩処を照らす、「未来の風景づくり」などの構想を提案。続いて馬見原まちづくり協議会より、今までのまちづくりの報告がなされた。

ウォッチングに参加していた熊本大学講師の桂英昭氏は、20年にわたる熊本県各地のまちなみ研究から「先達の築いた文化を受け継ぎ、独自のまちづくりをすることで、町を活性化することができるはずだ」との提言を行った。

ウォッチングの参加者からも「自然を活かしたまちづくり」「日向街道中心の歴史を活かしたまちづくり」など、たくさんの発案があり、今までの討議の方向性を再確認することができた。



様々なイベントを通じて深まるアートポリスへの理解

インテリアからロゴマークまでの多彩な作品

小さなものから大きなコトまで
KD21 し・ご・と展

上通り郵便局「プラザU」（熊本市）
11月8日～13日



くまもとデザイン協議会(KD21)の会員のプロフィールと、代表的な作品をパネルで紹介。デザインの世界はインテリアからモニュメント、標識、ロゴマークまで幅広い。見学者からは、「デザイナーの発想の豊かさに改めて驚いた」「実物を見てみたい」という感想が聞かれた。日ごろ、接する事の少ないデザイナーたちの素顔に触れ、デザインに対する関心を高める契機となった。

近代建築を未来に残すための方法を模索

21世紀の遺産
「熊本の近代建築」

同仁堂スタジオライブ（熊本市）
11月10日



熊本県建築士会主催で、熊本県内に残る明治から昭和初期の近代建築をどう残していくか、というテーマのシンポジウムが行われた。崇城大学の磯田祥史氏が、具体的な保存方法を説明。明治時代の商家の修復に取り組む寺田順子氏と、実際に大正時代の商家に住む後藤環氏が、それぞれの悩みを語った。一般の参加者からも「経済的な問題が大いだが、良いものを未来に残していくのは、私たちの義務ではないか」との意見も出された。

小中学生もアートポリスを体感
アートポリス観て、聞いて、
触って、感じる…
ウォッチング&トーク

熊本市中心部：11月12日



KD21主催で、11月12日に行われたウォッチング&トークでは、熊本市内のアートポリス施設等5カ所を巡った。最終地点の熊本北警察署でのディスカッションでは、熊本市花畑パークトレイルの感想等が出た。参加者のうち半数が小中学生で、次世代を担う者にとって、アートポリスを意識し、考える良い機会となった。

住まいの変遷から考える
建築士の仕事

住宅のうつりかわり
と住宅作品展

県立美術館分館（熊本市）
11月14日～19日



会場には古代から明治時代までの移り変わる住まいの歴史と、熊本県建築士事務所協会会員が手がけた個人の住宅を、約40点のパネルと模型で紹介。昔の日本人が住まうことをどのように考えていたのかを知ること、改めて現代の建築家の仕事を見つめるきっかけになった。

地域社会やユーザーに
喜ばれる作品づくり

熊本における
現代建築展

県立美術館分館（熊本市）
11月21日～26日



熊本県建築士事務所協会の有志たちのパネルや建築模型の作品展。阿蘇白水美術館や国際交流会館といった作品からは、アートポリス事業に刺激を受けながら、地域社会、ユーザーに喜ばれる作品をつくりたいという思いが伝わってくる。

素材感を大切にした
地元建築家の作品

JIA熊本建築家の会
作品展

県立美術館分館（熊本市）
11月28日～12月3日



「素材・表象 P ART2」と題したJIA熊本建築家の会の作品展。会場には会員19人が手がけた個人の住宅やビル、公共施設などの多彩な作品の模型やパネルが並んだ。木材やコンクリートの素材感が伝わる作品の数々に、見学者の中からは「こんな建物に住んでみたい。建築や環境のことを考えるいいきっかけになった」との声が聞かれた。